

座頭

ひょっくりひょっくりひょっくり
まかり出でたるやつがねは
色にも酒にも
目なし鳥
どっこいそうは虎の皮
禪のはしは取られても
恋の手取りの優法師
なか／＼その手じゃまいるまい
悪洒落な
梅に鶯
垣に朝顔
按摩 針
まんざら退いた
仲じゃない
一番相撲でまいるべい
引き捨て
負い投げ
内無双
獅子の洞入り
ほら返り

工工畜生めと負け腹で
追えどたたけど
くる
くる
アアほつとした
工工ままよ
まわる音頭の一節は
花におく露
小笹のあられ
こぼれ易さよ
我が涙
よいやさあ
アよいやなあ
工工またしてもしつっこい
杖振り上げて打たんとせしが
イヤ
これでは行かぬと気を変えて
コイ
コレわんじやいな
そのように
わしをじらすが楽しみか
主の毛色の良し悪しは
目には見えねど初雪や

その足跡の梅が香の
洩れて慕うも遠吠えを
声で聞き知る私じゃものを
あんまりむごいと寄り添えば
ざれて添い寝の仇枕
ぞめきも通う
紙砧
姑嫁ふる嫁下女をふる
下女はな工
釣瓶の縄を振る
ずいとこきや
いつかな
構うことはねえ
わしが願いが叶うならば
今の浮世に
一人寝せずに寝ませまい
ずいとこきや
いつかな
構うことはねえ
狭い浮世じゃ
ないか いな
我等も浮かれ座頭のほう
おや

また悪洒落めが杖と笛
盲目探しの身は四つ這い
後を慕つて走り行く。